リコスの勲章

りんりん

©妄想だだ漏れバケツ
（https://dadamorebucket.com）

1

「こら、アンリ！廊下を走るんじゃない」
「ごめんなさい！」
ヨナの叱る声を背中に聞きながらも、アンリの足は止まらない。
口元は自然に綻んでしまい、心はふわふわと浮き立っていた。
やっとゼロに会える。
ゼロはマリクの小隊を引き連れ、郊外の小さな村に出かけていた。今回の任務は、その村で相次いでいた暴動の調査及び鎮圧。任務は無事遂行された。ところが、昨夜帰還したのは隊員だけだった。マリクの話では、ゼロは帰途で突然用ができたため別行動となったらしい。
そして今日、一日遅れでゼロが帰還したという知らせが届いだのだ。
アンリがゼロに会うのは、一週間ぶりだった。
事情を知っているヨナも、今日ばかりは大目に見てくれるのか、それ以上の叱責は飛んでこなかった。
早く『ただいま』を聞きたい。
あの、ちょっと低くて甘い声で。
こちらを振り返り、優しい笑顔で手を差し伸べるゼロの姿が心に浮かんだ。
アンリはすぐにでも部屋に飛び込みたかったけれど、ドアの前でかろうじて立ち止まった。髪を手早く手櫛で整えてから、大きな深呼吸を一つして、ノックをする。
どうぞ、の返事とほぼ同時に、飛び込むようにドアを開けた。
「お帰りなさい、ゼロ！」
窓際にいたゼロは、制服姿のまま、アンリを振り返った。
そしてアンリの頭の上から爪先まで視線を滑らせた。まるで品定めをするように。
それはほんの一瞬。瞬きぐらいのわずかな時間。
だけど、まっすぐゼロの腕の中に飛び込むつもりだったアンリの足を止めるのに十分な「違和感」だった。
「……ただいま、アンリ」

ゼロが何事もなかったように優しく微笑んで、手を差し伸べる。
心で思い描いていた通りの、いつもの彼の、優しい笑顔だ。
だけど。
アンリは違和感を抱いたまま、ゆっくりとゼロの元へ向かう。
廊下を走り抜けてきたはやる気持ちは、水をかけられたようにすっかりしぼんでしまった。そのかわりに心の中に生まれた、自分でもうまく説明できないもやもやとした何かが、アンリの歩みを遅くする。少しずつ足が前に進まなくなり、ゼロの手にたどり着く前に、ついに彼女の足は止まってしまった。
「……どうかしたのか？」
不思議そうにゼロが問いかける。
自分でもわからない。
どう答えたものか迷うアンリの耳に、くぅ、という小さな声が聞こえた。
声のした方を見ると、リコスがバスルームへの扉の影から、ひょこりと顔を覗かせている。
「リコス。どうしたの？そんなところで」
名前を呼ばれたリコスは、すぐにアンリの元へ駆け寄ってきた。足元にまとわりついて、甘えるように鼻をならす。いつもなら元気に振り回されている尻尾も、しおれるように下がってしまっていた。
（いつもなら、帰ってきたゼロにじゃれついて離れないのに）
「どうしちゃったの、リコス？」
アンリはしゃがみ、リコスを撫でてやる。
リコスの様子もいつもと違う。
具合でも悪いのだろうか。
「そんなことより、やっと帰ってきた恋人に、キスもしてくれないのか？」
――今、そんなことって言った？
アンリは我が耳を疑うような思いで顔をあげた。

見下ろしているのは、いつもの優しい笑顔だけど。今の言葉も、ゼロの声だったけれど。ゼロの口から出たものだとは信じられない。

「早くお前を抱きしめたいと思っていた」

ゼロはアンリの驚いた顔を気にもとめず、彼女の腕を掴むと、強引に立たせ、抱き寄せた。いつもより強く、柑橘系のコロンが香る。

何かざらついたもので肌を擦られるような感覚が、ぞわりと這い上がってくる。

「ゼロ……」

アンリは思わず身をよじって逃げようとしたけれど、ゼロの力は強くて、アンリは逃げられない。

（いや、怖い……！）

「痛ってええええ」

突然、ゼロが素っ頓狂な声をあげた。

驚いて見ると、ゼロが醜く顔を歪めていた。彼のこんな表情は、今までみたことがない。何事かと足元に視線を動かすと、リコスが必死の形相で、ゼロのふくらはぎに噛み付いていた。

「リコス！」

アンリは驚きのあまり、咄嗟に動けなかった。

「くそ、離せよ！」

ゼロは品のない悪態をつきながら、必死でリコスを振り払おうと足をふりまわしたり、引っ張って引き剥がそうとした。だけど噛みついたリコスは離れない。喉の奥から、聞いたことのないような低い唸り声を上げている。

「ちくしょう、この野郎！」

ゼロはついに拳を握り締めて、リコスを殴ろうとした。

「やめて、何するの！」

アンリは慌ててリコスを庇うように抱きしめた。

リコスはやっとゼロの足から離れたが、まだアンリの腕の中で牙を剥き出し、ゼロを睨みつけるようにして、低い唸り声をあげ続けている。

ゼロも、アンリがみたことがないような凶悪な表情をしている。

リコスもゼロも、どうかしている。

「ゼロ、一体どうしちゃったの？」
アンリは震える声で問いかける。
ゼロははっとすると、取り繕うように、いつもの穏やかな表情を取り戻す。
「……すまない、疲れているんだ、きっと。許してくれ」
ゼロはいつもの柔らかい微笑みを浮かべたけれど、アンリは微笑み返すことはできなかった。
「疲れているなら、ゆっくり休んだ方がいいと思う。リコスは私が預かるから」
アンリはリコスを抱きかかえたまま、ドアまで後ずさると、部屋を飛び出した。廊下に出た途端、駆け出す。
ゼロが何か言っていたかもしれないけれど、アンリは振り返ることもせず、逃げるように走り続けた。
幸い、ヨナに見つかって咎められることはなかった。

2

「おっと」
混乱しながら部屋に駆け戻る途中で、アンリは誰かにぶつかった。
弾き返されるようによろけたアンリは、しっかりとした腕に支えられた。
「ごめんなさ……、ランスロット様！申し訳ありません」
ランスロットは勢い付いたアンリの体当たりにもびくともせず、アンリの顔を見つめると、わずかに眉をひそめた。
「何があった」
ランスロットの表情はほとんど変わらない。だけど静かな声が、様子のおかしいアンリを案じてくれている。
「ランスロット様、あの、あの、……ゼロが……」
アンリは落ち着いて、順を追ってランスロットに説明しようとした。だけどゼロの名前を口にした途端に、涙が溢れ出してしまった。

一体何が起こったのか、アンリにもわからない。
混乱する自分の心を見極めようとすると、深い深い喪失感が現れた。
アンリはおそらく何かとてもとても大切なものを失くしてしまったのだ。だけどそれが一体何なのか、はっきりわからない。
犬を抱きしめたまま子供のように泣きじゃくるアンリを見つめ、ランスロットはそっとため息をつくと、自分の部屋へアンリを招き入れた。

外では木枯らしが寒そうな音を立てている。
でも部屋の中は暖かかった。
暖炉の前でゆったりと長くなって眠っていたシャインは、アンリたちが入ってくるとピクリと耳を動かしたが、こちらを向くこともなく、挨拶のように尻尾を一回パタンと振っただけだった。
アンリはリコスを膝に抱え、勧められるままにソファに座った。

ランスロットはしばらく何も聞かなかった。
暖かく静かな部屋の中で、アンリの動揺した心も少しずつ落ち着いてきた。
やがて、俯いたままのアンリの前に、湯気を立てる紅茶がそっと置かれた。
ランスロットが手ずから淹れてくれた紅茶からは、甘い香りが優しく立ちのぼる。アンリもよく知っている杏のリキュールの香りだ。
紅茶はティーカップではなく、マグカップに淹れられていた。ランスロットの優雅な仕草に、コロリとした厚みのあるマグカップはあまり似合わない。だけど温かみのあるまろやかな手触りと伝わってくる温もりは、アンリを慰めてくれた。
部屋の中は暖かいのに、体はなぜか冷え切っている。アンリは温もりを求めるように、マグカップを両手でしっかり包み込んだ。
膝の上のリコスも、アンリを温めるかのようにぴったりと寄り添っている。もしかしたら、リコスも寒いのかもしれない。

「……なるほど」
アンリの辿々しい説明を聞き終えたランスロットの瞳が、考え込むように細められた。こんな表情をすると、彼の整った容貌は、冷たそうな印象を与える。
だけどアンリもリコスも、ランスロットの優しさをよく知っていた。
やがて彼は冷たく研ぎ澄まされた表情のまま、口を開いた。
「俺は帰還したばかりのゼロから報告を受けた。その時、不審なものは何も感じなかった」
アンリは不安になって、唇を噛み締める。
だけどランスロットは表情を変えないまま続けた。
「だが、ずっとゼロの一番近くで寄り添ってきたお前とリコスが違和感を感じたというなら、そこには必ず何かあるはずだ」
「ランスロット様……」
「早急に調べよう。お前とリコスは、明日の夜までゼロに近づくな。……できるか？」
「……はい」
アンリはリコスを抱き寄せながら頷いた。

3

自室に戻りベッドに横になると、アンリはリコスを抱き寄せた。
ゼロのことを思い出すと、またじわりと涙が滲んできた。
ランスロットに、「ゼロに近づくな」と言われて、アンリは心のどこかで安心していた。そしてその事実に、彼女はさらに傷ついていた。
まさか自分がゼロに会いたくないと思うなんて。
あんなに一緒にいたのに、ゼロにはまだ自分の知らない部分があったということなのだろうか。
そう考えると、「ゼロに会いたくない」と考えるのは間違っているように思えてくる。だけど、もう一度あのゼロに向き合う勇気がどうしてもでてこない。
ゼロに会うのが、怖かった。
リコスが、くぅ、と慰めるように鼻を鳴らす。
アンリはリコスのふわふわした毛を撫でた。

まるで、宇宙の真ん中にリコスと二人だけで放り出されたよう。
二人は、帰る場所をすっかり見失ってしまった。
寒々しい現実から逃げるように、アンリはリコスと寄り添いあったまま、眠りについた。

4

アンリが出て行ってからしばらく考え込んでいたランスロットは、もう一度執務室に行くことにした。今日ゼロに報告を受けた場所に戻って、その時のことを思い出し、何か妙な兆候はなかったか、自分が見落としていることはなかったか、確認するつもりだった。
さて、どうしたものか。
消灯時間を過ぎ、人気のない廊下を歩きながら、ランスロットは思考を巡らせ続ける。
考え事をしながら執務室のドアに手をかけた彼は、ピタリと動きを止めた。
誰もいないはずの室内から、物音が聞こえる。
ベルトの短剣を確認してから、ドアを開け、明かりをつけた。
中にいた人物が、驚いて振り返える。
ランスロットも彼がいたことに驚いたが、表情を押し隠した。
「……ゼロ、明かりもつけずに何をしている？」
「すみません……」
ゼロは、いつものように控えめに目を伏せた。
ランスロットはゼロに気づかれないように、彼を観察する。表情や仕草は、見慣れたゼロらしいものだ。
まるで忍び込むように執務室にいたゼロはあからさまに怪しい。だけどランスロットは先ほどのアンリの報告を鑑みて、敢えて追求せず、様子を見ることにした。
「探し物か？」
「……はい、調べたいことがあって書類を探していました」
「……書類？」
「先日の、アヴァロン・カンパニーの」

「ああ、それならエドガーが持っている。生憎休暇中だが、明日の午後には帰るはずだ。戻り次第、お前の元へ届けさせよう。それでいいか？」
ランスロットは微笑んで見せた。
「はい、ありがとうございます」
礼儀正しく挨拶をして出て行こうとしたゼロを、ランスロットは呼び止めた。
「ゼロ、何か困っていることはないか」
「えっ」
本当に思いがけないことを聞かれたというように、ゼロが目を見開いた。
「いえ、その、特には」
「……そうか。赤の軍がいつでもお前と共にあることを忘れるなよ」
ゼロはぎゅっと眉間に力を入れたが、すぐに顔を伏せた。
「ありがとうございます」
ゼロは静かに執務室を出て行った。

ランスロットはゼロの足音が聞こえなくなってから、おもむろに、机の一番下の引き出しの鍵を開け、厚みのあるファイルを取り出した。
アヴァロン・カンパニー調書。
たった今ゼロが探していた書類だ。
調書の中身は全て頭の中に入っているが、ランスロットはファイルを開いた。
アヴァロン・カンパニーは、3年前突然クレイドルに現れた海外投資会社だ。異国にある大量の魔法石が自生する森を買い取り、毎年一定量の魔法石を採掘し、それを資産に替えるプランを紹介し、投資を募っていた。その投資話に乗った資産家たちからフィードバックが滞っているとの相談を聞くようになったのが昨年初め。外交官ムースが現地まで赴いて調査した結果、そのような森はなく、アヴァロン・カンパニーは実体のない会社だと判明した。他国との国交に力を入れ始めたクレイドルで初めて起きた、大規模な詐欺事件だ。
直接投資を募った連中はすぐに捕まったが、彼らだけで全てを取り仕切ることができたとは到底思えない。

赤の軍では、上流階級に詳しい、彼らに指示を出した連中がいるはずだと考えた。しかし、軍の調査は未だその黒幕にたどり着けていない。

――さて、どうしたものか。

この書類を、ゼロが隠れて調べようとしていた。

ランスロットにとって、他の幹部と同様、ゼロは絶対の信頼に値する部下だ。

もしゼロがランスロットに言えないようなことをするとしたら、それは彼が、他に選択の余地がないほど追い詰められているということを意味する。かつての自分のように。

あるいは。

以前耳にした、ゼロのタトゥーのことがふと頭をよぎった。

「さて、どうしたものか」

ランスロットは今度は声に出してつぶやくと、わずかに眉を寄せ、静かに目を閉じた。

5

アンリはちょっと遅い昼休みを取って、裏庭のベンチに腰掛けていた。朝あまり食べなかったアンリのために、給仕係のクレイトンが温かい紅茶の入ったポットと焼きたてのビスケットを持たせてくれた。

（心配かけちゃった……）

反省とともに小さなため息をつく。

足元ではリコスが無心に風に舞う枯れ葉にじゃれていた。昨夜のことが嘘のように、いつも通りのリコスだ。

昨日はゼロがいつも通りのゼロではなく、リコスもいつも通りのリコスではなかった。だけどアンリは迷わずリコスを連れて、ゼロを置き去りにしてしまった。

（本当に、それでよかったのかな）

一晩置いて考えると、ますますわからなくなってくる。

もう一度、小さなため息がこぼれた。

ふと、俯くアンリの足元に影がさした。

「そんなにしょげないで下さい」

聴き慣れた柔らかな声に、慌てて顔をあげる。
「エドガー！」
「ただいま戻りました。ランスロット様から一通りの話は聞きました。俺の休暇はちょっとタイミングが悪かったみたいですね」
エドガーは申し訳なさそうに微笑んだ。
頼もしい味方が帰ってきた。
アンリはおかえりなさいの言葉も忘れて、エドガーに訴える。
「エドガー、どうしよう、やっぱり私、間違っていたのかも……」
気が緩んでしまったのか、最後は涙声になった。
唐突なアンリの訴えにも驚かず、エドガーは膝をついて、アンリの顔を覗き込んだ。微笑みを消し、真剣な表情で、ゆっくりアンリに語りかける。
「アンリ、直感を軽くみてはいけません。貴女がゼロに恐怖を感じたのなら、そこには何かがある。貴女はすぐに逃げていいのです。自分の身を守ることを第一に考えてください。俺は、貴女が無理にゼロと仲直りしようとしなくて本当に良かったと思っていますよ」
エドガーの柔らかな声を聞いていると、昨日から不安定だったアンリの心も、落ち着いてきた。
「エドガー……」
「大丈夫、もし貴女が間違えていたら、俺とゼロが教えてあげます」
エドガーは付け足すと、さっきから大喜びで戯れついているリコスを撫でた。
「さて、見たところリコスは怪我もしていない、具合が悪そうでもない。そうなると、答えは出たようなものですね」
立ち上がったエドガーは、にこりと笑ってアンリに手を差し出した。
「さあ、一緒にゼロに何が起こっているのか確かめに行きましょう。幸い今日の午後はエースの隊の訓練があります」
「でもランスロット様に、ゼロに近づくなって言われてる」

「大丈夫。貴女のことは、俺たちが守ります」
アンリはぎゅっと唇を引き結ぶと、覚悟を決めてエドガーの手をとった。

6

訓練場を見ると、どういうわけか、小隊長のマリクが整列した隊員の前にいて、ゼロはその後ろのベンチに腰掛けていた。
エドガーは、アンリたちに訓練場の手前で待っているように伝え、ゼロの元へ何の気負いもない様子で近づいていった。
アンリはドキドキする胸の前で祈るように手を重ね、エドガーとゼロを見守る。
リコスはアンリの足元に行儀よく座っていた。
「あいつどうするつもりなんだ？」
「カイル！」
いつの間にかカイルも兵舎から出てきていた。
「この訓練が終わったらゼロを診察してみるって言ってんのに、エドガーの奴それまで待てねーってよ」
カイルは頭を掻きながら顔をしかめる。
ランスロットとヨナも兵舎から出てきた。
エドガーの声が聞こえてきたので、アンリは慌てて訓練場へと視線を戻す。
「おや、ゼロ、どうしたんです。訓練は？」
「ああ、右肩を痛めてしまって……」
「それは大変。まあ、左で抜けばいいでしょう。剣を取りなさい。久しぶりに愛弟子の上達具合を確認してあげましょう」
「そ、そんな無茶な。俺は、怪我を……」
柔らかな口調とは裏腹に、エドガーは目にも止まらぬ速さで抜いた剣先をゼロに突きつけた。
ゼロは、引きつった表情で、固まったように動かない。
何事か、とざわめき始めた隊員たちを、マリクが抑える。やがて皆、アンリと同じように静かに二人の様子を見守り始めた。
「さあ、立ち上がって剣を抜け！」
柔らかなのに凛とした、芯のある声が響いた。

ゼロはエドガーの剣先から逃れようと立ち上がり、後ろに下がろうとしたが、エドガーは逃さなかった。エドガーの剣先は、まるで吸い付くようにゼロの喉元に突きつけられたまま、少しもぶれない。

「くっ……」

ゼロが観念したように、剣を抜いた。

（んん……？）

アンリは思わず眉を寄せた。

剣を構えたゼロの姿が、なんだかいつもと違う。

剣を扱うゼロの姿は、アンリにいつも人間の体の美しさを思い起こさせた。「鞘から剣を抜き構える」ただそれだけの動作が、精緻に研ぎ澄まされた美しさを持っていて、見惚れてしまうことさえあった。

それなのに。

今日のゼロからは、その美しさがかけらも感じ取れない。つまり、ひどく不格好なのだ。

「……どういうことだ」

不審気なランスロットの声がした。

「ランスロット様……？」

ランスロットの隣に立つヨナも、不可解そうに眉を寄せている。

「お前たちにはまだあれがゼロに見えるのか？」

「えっ……？」

ランスロットの言葉の意味がわからないまま、アンリとカイルは再び訓練場の二人を見た。

鋭い音がして、エドガーの剣が一撃でゼロの剣を叩き飛ばす。エドガーはそのまま容赦無くゼロの胸を蹴り飛ばし、ゼロは尻から不格好に倒れ込んだ。エドガーの足がゼロの胸を乱暴に押さえつける。

「ひっ」

ゼロが情けない悲鳴をあげた。腰を抜かしてしまったようで、後退りすることさえできない。

「あれっ……？」

アンリは思わず、その場に似つかわしくない間の抜けた声をあげてしまった。

「なんだありゃ」

カイルも訝しげに呟いた。

「一体誰だ、あいつ？」

何が起こったのかわからなかった。
今、エドガーの足に押さえつけられ、青い顔で情けなく震えている男は、――ゼロではなかった。
さっきまでは、確かにゼロだったはずなのに。
同じ髪の色、目の色、良く似た顔立ち。背格好も同じ。だけど、明らかにゼロではない別の人間になっている。
見たこともない、無様な男だ。
二人の様子を見守っていた部下たちも、ザワザワと騒ぎ始めた。
呆然と訓練場を眺めるアンリの隣で、ランスロットがヨナに手早く何かを命じた。ヨナは神妙に頷き、厩舎の方へ駆けていった。
ヒュ、と空を切るような鋭い音がして、アンリは再び訓練場に視線を戻した。
エドガーの剣が、「ゼロに似た男」の右耳の上でピタリと止まっている。
「ゼロはどこです」
男は真っ青だ。声も出せないようで、パクパクと口を動かしている。
エドガーがもう一度剣を大きく振り上げ、躊躇せず同じ場所に振り下ろした。
アンリは思わず身をすくめ、目を閉じた。
「うわあああ、言う、言う」
男の声は裏返って、甲高い悲鳴のように聞こえた。
そっと薄目を開け、恐る恐る男の様子を見る。
男の耳はまだ頭に付いたままだった。エドガーの剣は再び男の右耳の上でピタリと止まっている。だけど今度は少しだけ深く振り下ろされたようで、男の頬を一筋の血がゆっくりと伝い落ちた。
男はすでに子供のように泣き出していた。ガタガタと震えながら、涙でぐしゃぐしゃの顔で情けなく訴える。
「あいつはモートン家にいる。……ブランシェットの、モートン家だ」

ブランシェットはクレイドル郊外の村で、モートン家はその村の大地主だ。ブランシェットは、ゼロが部下たちと別れた村でもある。
エドガーは小さく息をついた。
「モートンが甘い人間でよかった」
エドガーはその場で直ちにランスロットの許可をとり、ゼロの小隊を引き連れ、ブランシェットに向かった。

7

「……なるほど」
ヨナに呼ばれて、赤の兵舎に駆けつけた魔法の塔の最高顧問ハールは、ゼロに扮していた男をしばらく観察した後で、納得したように呟いた。
赤の兵舎の医務室。本来なら執務室に行くはずだったが、カイルが手当の必要を強く主張したので、皆は医務室に移動した。
幹部が見守る中、椅子に縛られた男は無言でハールを睨み付ける。
ハールは怯むことなく、日頃の彼らしからぬ冷徹な眼で男を見下ろした。
「よくできている」
ハールはそう言いながら左手で魔法石を取り出すと、右手を男にかざした。
男が青い光に包まれる。
「あ……！」
光が消えた時、その場にいたほとんどの者が思わず声をあげていた。
声こそあげなかったが、ランスロットも驚きに目を見開いた。
男は、再びゼロになったのだ。
「ハール、どういうことだ」
「印象操作の魔法の応用だ。良く似た見かけと仕草の人物の、印象をあえて曖昧にして、見たものにそれがゼロだと錯覚させる」
ハールは再び男にかけた魔法を解き、ランスロットに向き合った。

「とてもよくできている……もっとも、俺がきた時にはすでにその魔法はほとんど解けていた。絶対にゼロではないとわかるようなことでもあったのか？」
「俺は此奴が剣を抜く姿を見た途端、ゼロには見えなくなった」
ランスロットの答えに納得したように頷いたハールは、わずかに表情を和らげた。
「ふ……なるほど。剣の天才を演じるにはこいつは力不足だったわけだ」
鍛錬を積んだ者なら、剣の扱い、剣を構える姿を見ただけでその人物がどの程度剣を使えるか判断できるそうだ。剣に関して全くの素人だったアンリでさえ違和感を感じたのだから、ランスロットやヨナ、そしてエドガーには、彼が素人であることが一目瞭然だったのだろう。
エドガーは最も効果的な方法でゼロを見極めたのだ。
「……さて、まだ魔法が残っているな。まずは髪」
ハールが再び男に手をかざすと、黒い髪の色が抜けていき、髪全体がメッシュ部分と同じ金色になった。
「そしてタトゥー」
首にあった、ゼロと同じタトゥーが消える。
「そして肌の色」
褐色の肌の色が斑に抜けていき、やがて全てランスロットと同じぐらい白く明るい肌色となった。
皆が唖然として見守る中、ハールが全ての魔法を容易く解いていく。
最後には、ゼロに少しだけ顔立ちが似た、見知らぬ男が残った。
「ふむ、瞳の色だけは自前か」
瞳だけは、ゼロと同じ青空の色だった。金の髪と白い肌はランスロットと同じなのに、彼はどこか薄汚れた印象だ。荒んだ表情のせいかもしれない。
男は魔法が次々解かれていく間も、諦めたように静かだった。
「名前は」
ハールが端的に尋ねると、男は拗ねたように視線を逸らした。
「答えよ」

ランスロットが静かなのに威圧感のある声で再び尋ねた。
男はランスロットを睨みつけたが、すぐに目をそらし、不貞腐れたようにボソリと答えた。
「クリストファー」
「クリストファー、何のためにこんなことをした」
「……」
「少々痛い目を見てもらっても構わんのだが」
ランスロットの瞳が赤く染まり始め、カイルが慌てて止めた。
「おい、待て待て。魔法は駄目だ！」
かつての魔法の塔との戦いでランスロットの体はずいぶん弱っているため、主治医のカイルはまだ彼に魔法を禁じていた。
「それなら俺が代わりにやろう」
すかさずハールが新しい魔法石を取り出した。彼の右手の中でぱちぱちと青白い光が爆ぜ始める。
「別に魔法を使わずとも痛めつけることはできる」
ランスロットが張り合うように剣を抜いた。
アンリの足元ではリコスが歯をむき、低い唸り声をあげている。
カイルでさえ彼らの攻撃を止めようとはせず静観していた。
この場にいる誰もが怒っていた。
「わかった、話す。話すからそんな物騒なものはしまってくれ。あんたも。その凶暴な犬を向こうにやってくれ」
男はあっけなく降参した。
「凶暴だなんて失礼ねえ、こんなに可愛いのに」
アンリが抱き上げると、リコスは甘えるように、くう、と小さく鼻を鳴らした。

8

クリストファーはモートン家に滞在している劇団の俳優であり、金に釣られてこの仕事を引き受けたのだと告白した。
目的は、アヴァロン・カンパニー事件の調査がどこまで進んでいるのか確かめること。モートンは赤の軍

の調査がすでに自分にまで及んでいるのかを知りたかったのだ。
ランスロットは目を伏せた。
アヴァロン・カンパニーの詐欺事件に関わっていた有力者の一人は、モートン卿だった。軍の調査はまだモートン卿にたどり着いていなかったので、彼の墓穴のおかげで、調査は大きく進展したことになる。
しかし、ランスロットの知る限りモートン卿はあれほど緻密な犯罪を計画できるような人物ではなかった。さらに背後にはモートンを操った大物が控えているはずだ。
どうやらこの事件は、当初の予想よりも根が深いらしい。エドガーは無事この事実に辿り着けているだろうか。
ランスロットは物憂げな表情のまま窓の外へ目をやった。
ランスロットの追及が一段落したと見たハールが口を開いた。
「俺も2、3確認したいことがあるんだが」
ランスロットが頷いてみせると、ハールは男に向き直った。
「この件に関わっている魔法学者について教えてほしい」
「魔法学者？」
「魔法で君の姿を変え、君に赤の軍内部の情報を教えた者だ」
クリストファーは姿を変えられた後、さらに魔法で赤の兵舎の映像を見せられたという。赤の兵舎の様子を頭に叩き込み、さらに隣の部屋にいるゼロの様子を覗き見し、赤のエースの振る舞いやくせなどを身につけるように命じられた。俳優である彼が完璧に赤のエースを演じるために。
答えないクリストファーに、ハールは重ねて尋ねた。
「……金髪の、背の高い若い男ではなかったか？」
「わからねえよ。いつもローブを目深にかぶっていたし……確かに会話したはずなのに、声さえ思い出せねぇ。くそ、何でだ」

クリストファーは吐き捨てるように答えた。戸惑いの浮かぶ表情は、とても嘘をついているようには見えない。

ハールとランスロットは顔を見合わせた。

おそらくかつて上級魔法学者のローブにかけられていた、従来の印象操作の魔法だ。

「ああくそっ、すっかり騙されたんだ。あいつの言うことは出鱈目ばかりだった」

「出鱈目？」

「あいつは赤のエースは孤立しているから絶対にバレる心配はないって言った！だから俺も引き受けたんだ。それなのに赤のキングでさえ気にかけている。あいつは全く孤立なんてしていないじゃないか」

クリストファーは声を荒げる。

これは本人に聞かせてやりたいな、とカイルが小さな声でつぶやいた。

クリストファーはアンリの方を見ると、太々しい笑みを浮かべた。

「あんたのことも聞いていたぜ。可愛い恋人がいるって聞いたから、ちょっとはいい目を見れると思ったのにな。その凶暴な駄犬さえいなければ天国を見せてやれたのに、残念だな、姉ちゃん」

アンリは頬に血が昇るのを感じたが、震える声で言い返した。

「……あなたには無理よ」

アンリの腕の中のリコスがまた低い唸り声をあげ、男がびくりと身をすくめた。

ランスロットが煩わしげに手を振った。

「聞くに耐えん。地下牢に入れておけ。あとの取り調べはエドガー達が帰還してからだ」

男は汚い悪態を吐きながら、兵士たちに連行されて行った。

「ハール、お前はダリムの仕業だと考えているのか」

「わからない。だけど、これは決して容易な魔法ではない。その上お前さえ気づかないぐらい、かけられた魔法は巧妙に隠蔽されていた。誰にでもできることではない。魔力だけではなく、術の研鑽が必要だ。俺の

知る限り、そんなことができそうなのはダリムさんかアモンぐらいしか思いつかない」
アモンは今投獄されている。だから。
「ダリムがアヴァロン・カンパニーに関わっていたと？」
ハールは答えず、ただ眉を寄せ目を伏せた。

9

もうすぐ5歳になるエリサは、近くの丘でユノの好きな花を摘んで屋敷に戻るところだった。
ユノはエリサの一つ年上のお兄ちゃんだ。二日前に木から落ちて足を怪我してしまい、今はずっとベッドの中にいる。
だから今日はエリサ一人だった。
屋敷のすぐ裏の丘は庭の一部みたいなものだから、一人でも平気だ。
ユノは寂しがり屋なので、エリサがいつも一緒にいてあげないといけないけれど、今日は大丈夫。
今日は、ユノの傍には大きなお兄ちゃんがいてくれる。
大きなお兄ちゃんは、一昨日突然家にやってきた。どうもお父様の大切なお客様らしい。
最初は怖い人だと思ったけれど、エリサやユノに怒るようなことは一度もなかった。
大きなお兄ちゃんはあまり喋らない。兄妹の部屋の窓際の椅子に静かに座って、本を読んでいる。でもユノやエリサが話しかけると、本を閉じてちゃんと話を聞いてくれた。そしてエリサが話終えるのを待って、低い、優しい声で短い返事を返してくれる。
屋敷の大人たちはみんな大人同士のおしゃべりや仕事が忙しいから、今までエリサの話を聞いてくれるのはユノだけだった。だけど大きなお兄ちゃんは、ちゃんとエリサの目を見て話を聞いてくれる。もしかしたらお兄ちゃんは体は大きいけれど、まだ大人じゃなくて、ユノやエリサに近いのかもしれない。
よく晴れた青空のような綺麗な青い目をしていて、黙っていると怖そうなのに、笑うと途端に優しい顔になる。

エリサもユノも、すっかりこの物静かなお兄ちゃんのことが大好きになっていた。
このお兄ちゃんが緑の瞳でないことは、ちょっとだけ、本当に残念。
だって、エリサの王子様は、緑色の瞳をしているはずだから。
去年のクリスマスプレゼントの絵本を読んでから、エリサの王子様は緑の瞳に決まっているのだ。
エリサは、いつのものように少し調子の外れた歌を口ずさみながら、屋敷をぐるりと囲む高い塀に開いた大きな穴をくぐろうとした。生茂る蔦が隠してくれている、ユノとエリサ、二人だけの秘密の通路。
ところが強い木枯らしが吹き付けてきて、いつもならユノがまとめて持っていてくれるはずのエリサの長い髪を蔦に絡みつけてしまった。
身を捩って外そうとしても、引っ張られて痛いだけの上に、さらに蔦が絡まってくる。
風が吹くたびにますます絡まって、蔦はぐいぐいと髪を引っ張る。エリサはついに身動きできなくなってしまい、困り果てて、くしゃりと顔をゆがませた。
「レディ、どうかそんな悲しい顔をしないでください。お困りなら、俺がお助けしましょう」
見上げると、緑の瞳の青年が微笑んでいた。明るいブラウンのさらさらした髪が、日差しを受けて輝いている。まるで彼自身が輝いているように。
エリサは突然現れた美しい青年を、髪のことも忘れてぽかんと見上げた。
「少しだけ、我慢してくださいね」
青年は、長くしなやかな指を器用に操り、丁寧にエリサの髪を蔦から外してくれた。その後で、エリサの髪を優しく整えてくれる。
「ほら、これでもう大丈夫ですよ」
彼が優しく微笑みかける。その笑顔を見て、エリサは確信した。
間違いない、彼がエリサの王子様だ。
「どうもありがとう」
さっきまでべそをかいていたことはすっかり忘れて、エリサはとっておきの笑顔を浮かべる。

「とても助かったわ。どうかうちでお茶でも飲んでいってくださいな」
恩人をもてなしもせず帰すなんて、モートン家の娘がすることではない。
「おや、それはありがとうございます。喜んでご招待に預かりましょう」
青年は、歌うような柔らかな声で答えた。
エリサは踊り出したいような気持ちだった。
――ついに、私の王子様を見つけたわ！

10

ゼロは読んでいた本からふと顔を上げた。
静かだと思ったら、ユノはいつの間にか眠っていた。
あどけない寝顔に目を細めてから、窓の外に広がる冬のブランシェットのもの寂しい風景に視線を移す。収穫を終えたひとけのない田園は、がらんと静まりかえっていて寒々しい。だけどここは本来豊かな土地だから、春になればきっと美しいことだろう。
（あいつらを連れて来たいな）
野原を元気に駆け回るリコスとアンリを思い、ゼロはふと頬を緩めた。
やっと手に入れた、ゼロの大切な家族。もう一週間以上、彼らの顔を見ていない。早く全てを片付けて帰りたいのだけれど。
（さて、どうするか……）
ゼロは悩ましげに眉を寄せると、もう一度深いため息をついた。
彼は一昨日からモートン家に滞在していた。
より厳密に言うと、足止めを食らっていた。
モートン家はクレイドル郊外の村、ブランシェットの大地主だ。
もともとゼロの隊の任務は、ブランシェットのずっと北方にある、別の村の暴動の鎮圧だった。思った以上に手こずったが、それでもなんとか村の平和を取り戻し、一昨日、やっと帰途についた。ところが食事のために立ち寄ったこの村で、ゼロは偶然、指名手配犯に酷似した男を見かけてしまったのだ。
赤の軍がここ数年追い続けている凶悪犯、通称パペ

ット。
その時、隊員たちはすでに皆疲労困憊していた。
ゼロは不確かな情報に彼らを付き合わせるのは申し訳なく、かといって指名手配犯と疑われる人物を見逃すわけにもいかない。結局隊員たちだけを先に帰してから単独でその男を尾行し、このモートン家に辿り着いたのだった。
ゼロが追ってきた男は、数日前からモートン家に滞在している流しの劇団の団長だという情報を使用人から得た。
人違いである可能性や援軍を呼ぶ間に見逃してしまうリスク、諸々を天秤にかけた上で、ゼロは結局、正面からモートン家を訪ねることにした。
モートン卿はゼロを慇懃に歓迎すると、ちょうど屋敷に滞在している劇団が2日後に上演するので、是非それまでゼロも屋敷に留まり、観劇していくようにと勧めてきた。
赤の軍の兵士が巡回先の村の有力者を訪ねることも、屋敷に滞在することもそれほど珍しいことではない。
この怪しい劇団について調べる上でも、都合の良い申し出だった。ゼロは赤の兵舎に手紙で援軍を依頼し、自分はここに滞在することにしたのだった。
ゼロはこの2日間で、すでに劇団員達を調べ、団長が指名手配犯パペットに違いないこと、劇団員達もパペットの仲間であることを確信している。
それなのに。
彼は再び窓の外を見てため息をついた。
昨日には来てくれるだろうと期待していた援軍がまだ来ないのだ。
兵舎からここまでは、単騎で駆けてせいぜい二時間ほどだというのに。
他にも何か事件があって、人手が割けないのだろうか。今日一日待っても来なければ、ゼロ一人でなんとかする方法を考えなくてはならない。
「さて、どうするか」
ゼロはため息まじりに、今度は声に出して呟いた。
「どうしたの、お兄ちゃん？」
目を覚ましたユノが眠そうな目を擦りながら尋ねた。

「いや、何でもない。そろそろちゃんと起きないと夜眠れなくなるぞ」
「うん……だって退屈なんだもん」
ユノは憂鬱そうにぼやく。
モートン家の長男であるユノは、数日前に足を怪我して以来、ずっとベッドで過ごしているらしい。ユノはまだ5歳の少年だ。本当は外で駆け回りたいだろうにと、ゼロも気の毒に思っていた。
この家には幼い子供が二人いる。ユノと、彼の妹のエリサ。
どういうわけかこの家の大人は使用人も含め、あまりこの子供たちに注意を払っていないようだった。ユノは怪我をしているというのに、ゼロの知る限り、この部屋を大人が訪れたのは医師の診察の時と食事の時ぐらいだ。
ゼロ自身が特殊な子供時代を過ごして来たので、「普通の子供がどう扱われるのか」理解しているわけではない。それでもせいぜい5歳になるかならないかぐらいの子供が放ったらかしにされているのが気になり、結局モートン家滞在中は、昼間をほとんどユノの部屋で過ごすことになった。
「怪我が治ればまた走り回れる。きっとあと少しの辛抱だ」
慰めるようにユノの頭を撫でてやる。
「うん……ねえ、何かお話してよ。本読むのも飽きちゃった」
「お話？」
子供はどんな「お話」を喜ぶのだろう。
悩むゼロにはお構いなしに、ユノは無邪気に尋ねてきた。
「お兄ちゃん、家族はいる？」
「ああ、リコスとアンリがいる」
「一緒に住んでるの？どんな人？」
「ええと……リコスはレトリバーの子犬で」
「犬がいるの？いいなあ」
ユノの顔がぱっと明るくなった。
「僕もエリサも犬が大好きなんだ。だけどお母様が犬が嫌いだから、うちでは飼えないんだよ」

「そういえばお前たちの母親をまだ見ていないな」
「今はこの家にはいないよ。寒いのが嫌いだからって冬の間は暖かいところにいるんだ。うちにはほとんどいないんだから、犬がいてもいいと思うんだけど。ねえ、リコスはお利口？」
「……そうだな、利口なやつだが、時々困ることもある」
「どんな時に困るの？」
「ええと、例えばあいつは水遊びは好きなのに風呂が嫌いで……」
リコスを風呂で洗うのがどれほど大変か話すと、ユノは楽しそうに笑い転げた。
「いいなあ、僕もリコスに会いたいな」
「そうだな。春になったらここに連れて来たいと思っていた」
「僕にも会わせてくれる？」
「ああ、もちろん。リコスもアンリもお前の良い友達になるだろう」
「いいなあ、二匹も犬がいて」
「いや……」
アンリは人間の女の子だ。
ゼロがそう訂正しようとした時、廊下の方からエリサのはしゃぐ声が聞こえた。
「エリサが帰ってきた！」
仲の良い妹の帰還に、ユノが嬉しそうな声を上げた。
エリサはどうやら誰かと一生懸命話しているようだ。幼い少女が無邪気にはしゃぐ声は、聞いている方まで楽しい気分にする。一体誰とそんなに楽しそうに話しているのだろう？
不思議に思っていたゼロは、エリサに手を引かれながら部屋に入ってきた男を見て、ぽかんと口を開けたまま固まってしまった。

11

「またお前はそんな間抜けな顔して」
エリサに手を引かれて部屋に入ってきたエドガーは、おかしくて仕方ないというように笑っている。
ゼロはぽかんと開いてしまった口を辛うじて閉じた

が、言葉が出てこない。
「あら、お知り合いなの？」
「ええ、しばらく顔を見ていなかった友人なんです」
エドガーはエリサの大人ぶった問いかけに、微笑んで答えた。
「レディ、まずはそのお花にお水をあげてはどうでしょう。せっかく摘んでらしたお花が、少し元気がなくなっていますよ」
「あら、本当」
「俺は、久しぶりに会った友人とおしゃべりしていますので、どうぞごゆっくり」
「ありがとう。お茶の用意をして、すぐ戻るわね」
エリサはコトコトと愛らしい足音をたて、部屋を出ていく。
エドガーはゼロの顔を見て、苦笑した。
「そんな目で見ないでください。別にあのお嬢さんに悪さはしていないし、嘘も一つもついていません」
「よく言うな。しばらく顔を見ていなかった友人だって？」
「一週間ぶりですね、ゼロ」
咎めるように横目で見るゼロの視線を物ともせず、エドガーはにっこりと笑った。
「あたりの調査をしているときに偶然あのお嬢さんにお会いしたんですよ。ちょっと特殊な道を通ってここまでご案内いただきました」
「来るのが遅い」
「えっ？」
「手紙には大至急と書いたはずだ」
「手紙……？」
さらに言い募ろうとするゼロの鼻先に、エドガーはピタリと人差し指を立てた。
「どうも話が噛み合わない。ゼロ、俺への不満は後でいくらでも聞きますから、まずは情報のすり合わせをした方が良さそうです」
ゼロははっとして声を落とすと、ここ数日間のことを説明し始めた。

12

「……なるほど」
ゼロの報告を聞き終えたエドガーは、人差し指を口元に当て、目を伏せた。
ゼロには彼の頭脳が高速回転している音が聞こえるような気がした。
エドガーはその頭脳を忙しく働かせたまま、自分の考えをまとめるようにゆっくりと口を開く。
「偽者のゼロはアヴァロン・カンパニーの調書を探していたそうです。おそらく……あの事件に一枚噛んでいたモートンは、お前が突然訪ねてきたことで、自分の悪事がばれたと思ったのでしょう」
ゼロは想像もしていなかったモートンとアヴァロン事件の繋がりが出てきて、一瞬言葉を失くした。
しかも。
「待て、俺の偽物っていうのは何のことだ」
今度はエドガーがゼロに、兵舎で起こった騒動を説明した。
さらに想像もつかないことが兵舎で起きていたと知って、ゼロは動揺を隠せない。
エドガーは愉快そうに目を細める。
「おそらくなんらかの魔法かと思いますが……外見だけなら確かにそっくりでした。アンリとリコスが気付かなければ、我々も騙されたままだったかもしれません」
冷や水を浴びせられたように背筋が冷えた。
「アンリに何か……」
「安心しなさい、アンリもリコスも無事です。リコスが果敢にもアンリを守りました」
ゼロはほっと安堵の息をつき、エドガーはそんな彼の肩を励ますように軽く叩きながら続けた。
「剣を持たせてみれば一目瞭然でしたけどね。……覚えておくといい、お前はまた剣に助けられた」
ゼロは無意識に背筋を伸ばした。
「さて、モートン卿の話を聞きに行きましょうか。ついでにパペットも確保してしまいましょう。よくやりましたね、ゼロ」
師匠の労いの言葉は、少しだけゼロの疲労を軽減し

た。ゼロ自身は認めたくはなかったけれど。
「お父さんを捕まえるの？」
ベッドの上でおとなしくしていたユノが、か細い声で聞いた。彼の頬は紙のように白い。
「いいえ。まずはお話を伺うだけですよ」
エドガーは微笑みを浮かべたまま、ゆっくりとユノのベッドに近づいた。
ユノは首を横に振った。
「僕、知ってたんだ。お父様が何か悪いことをしてるって……。お兄ちゃんたちは、赤の軍の人たちでしょう？きっとお父様を捕まえにきたんだって思ってた」
ユノの大きな瞳に涙が盛り上がった。
「僕、お父様にもう、悪いことして欲しくない……だけど、お父様が牢屋に入るのは……」
ボロボロと大粒の涙がこぼれ落ちる。
ゼロは痛ましげに一瞬だけ目を伏せたが、覚悟を決めたように、ユノをまっすぐ見た。
「ユノ。クレイドルに住む人を、……彼らが、家族や、大切な人たちと一緒に笑って暮らせる毎日を守るのが、俺たちの仕事だ。そのために、悪いことをした人は捕まえなきゃならない」
「……うん」
「悪いことをした人は、その罪を償わなくてはならない」
「うん」
「罪を償ったお前の父親と、お前が本当に笑って暮らせるように、俺は俺の仕事をする」
ユノは声を出さずに、何度もうなずいた。
幼い子供が声を殺して泣く様子に、胸が痛んだ。
それでも、ユノが自分の父親の罪を抱えずに生きていくためにも、ゼロは自分の任務を果たさなくてはならない。
コトコトという小さな足音が聞こえてきて、ユノは慌てて涙を拭った。
しょげかえった様子のエリサがドアから現れた。
「一生懸命お願いしたのに、誰もお話を聞いてくれないの」
手には、すっかり萎れてしまった花を握り締めてい

る。
「おいで、エリサ」
ユノはさっきまで泣いていたことはおくびにも出さず、優しい笑顔を浮かべエリサを呼んだ。
エリサはベッドに駆け寄り、ユノに甘えるように顔を擦り寄せた。
ユノはエリサの肩を抱き、言い聞かせる。
「エリサ、お兄ちゃんたちはこれから大切なお仕事なんだって。だから、一緒にお茶を飲んでいる時間はないんだ」
エリサは悲しそうに、口をへの字にして俯く。
エドガーはエリサの前に膝をつき、恭しく彼女の手を取った。
「レディ、せっかくお招きいただいたのに、俺も本当に残念です。お詫びに、近いうちに必ず、俺の方からあなたをお茶にご招待しましょう」
「……エリサ」
悲しそうな顔のまま黙り込むエリサを促すように、ユノはエリサの名前を呼ぶ。
「……約束よ？」
「誓って、必ず」
エドガーが言うと、エリサがやっと少し微笑んだ。
「……さて、レディのお許しも出たことですし、行きましょうか」
エドガーは立ち上がると、ポケットから小ぶりのクラッカーのようなものを取り出した。
「何だ、それ？」
エドガーは不思議そうなゼロににこりと笑って見せる。
「オリヴァーに依頼していた魔法道具です。これで表に待機させている援軍に合図を送ります」
エドガーはそう言うと、寄り添う兄妹を振り返った。
「二人にも見せてあげましょう」
ゼロがユノを抱き上げ、窓のそばまで運んだ。
二人が窓の外を見れる場所まで来たのを確認して、エドガーは大きく窓を開けた。
「いいですか？空をよく見ていて下さい……1、2の、――3！」

エドガーが合図と共にクラッカーの紐を引くと、無音のクラッカーから淡い青い光と共にキラキラした光が広がってゆき、屋敷の上空に大きな虹を映し出した。
「虹だ！」
ユノが大きな目をさらに大きく見開いて、叫ぶ。頬に赤みが戻っていた。
エリサが無邪気な歓声をあげた。
「では、俺たちは行きます。どうか、俺たちがまた迎えに来るまで、この部屋から出ないように」
「うん、わかった」
エドガーの言葉に、ユノはしっかりとうなずいた。
さっきより瞳に力が戻っている。空にかかった大きな虹が、少しは彼を慰めたのかもしれない。

13

エドガーとゼロは、他の使用人に見つからないように静かに廊下を急いだ。
「子供が子供らしくいられないのは、やはり痛ましいものですね」
おそらく自分も子供らしい子供ではいられなかったであろうエドガーが、独り言のように呟いた。
ゼロがそっと隣を伺うと、エドガーの横顔にいつもの微笑はなく、本当に心を痛めているように見えた。
自分自身の子供時代も特異なものであったと自覚しているゼロは、どう答えていいのかわからず、ただ、そうだな、と小さな声で同意した。
「モートン卿は、今は？」
「この時間は温室で紅茶を飲んでいるはずだ」
「それは好都合。彼の書斎に案内を」
「えっ？」
まっすぐモートン卿の元へ向かうのだと思っていたゼロは、思わず聞き返した。
隣を見ると、エドガーはいつの間にかいつもの笑みを取り戻していた。何かを企んでいる顔で、まっすぐ進行方向を向いたまま続けた。
「マリクの隊が来るまでの15分で証拠を探します。間取りは頭に入っているでしょう」

「……こっちだ」
ゼロは昨夜のうちに確認しておいた書斎へと向かった。

14

モートン卿の書斎は、ちょうど真ん中にマホガニーの机が置かれていて、ドアから見て右側に暖炉とサイドボード、左側に本棚があった。幸い整然と片付けられており、置かれている物も少ない。探し物には好都合だ。
「お前は右側を、俺は左を見ます。手紙、帳簿の類を」
「わかった」
ゼロは直ちにサイドボードに向かった。
「モートン卿にあんな緻密な犯罪は無理です。おそらく背後にもっと大物が控えているはず。その手がかりを探して下さい」
エドガーは探索の手を休めないまま言った。
ゼロは少し疑問に思う。
ここで証拠を見つけなくてもモートンを捕らえることはできる。彼を捕らえた後で合流した隊員たちと共にこの屋敷全体の調査した方が効率的だ。直接モートンに問い詰めれば、事件の全貌も明らかになるだろう。
それなのにエドガーは先に証拠を手に入れることを選んだ。
一体、何のために。
探す手を休めないまま、忙しく思考を巡らせるけれど、エドガーの意図はわからない。
サイドボードの左の三つの引き出しを全て調べ終え、右の引き出しに移ろうとした時、暖炉の灰の中で何かが光ったような気がした。
ゼロは、手を止め、暖炉を見る。
（しまった！）
もしモートン卿が、「ゼロがアヴァロン事件の調査に来た」と思い込んでいたなら、急いで証拠隠滅を図ろうとするだろう。書類や手紙を手っ取り早く消滅させる方法は、燃やすことだ。

（エドガーなら、もっと早く気付いていたかもしれない）
ゼロは自分の不甲斐なさに唇を噛み締めながら、暖炉の脇にあった火かき棒で、今は火の入っていない暖炉の灰を丁寧にかき分け始めた。
「……あった……」
目的のものはすぐに見つかった。
おそらくはモートン卿宛の書簡の一部。半分は燃えていたが、幸運にも送り主の署名部分は残っていた。
ゼロは煤で汚れるのも構わず、暖炉に頭を突っ込むと、似たような紙の燃え残りを全て取り出した。
驚いたことに、暖炉で燃やされたにも関わらず、封蝋がそのまま残っていた。
封蝋の家紋は、クレイドルの住人なら誰もが知っている名家、クインシー家のものだった。
「なるほど、クインシー家が関わっていたとはね」
いつの間にかゼロの肩越しに覗き込んでいたエドガーが手を伸ばし、封蝋のついた燃え残りを手にとった。
「まるで魔法のように必要な証拠が残っていましたね……」
エドガーは一瞬だけ鋭利な刃物のように目を細め、考え込んだように見えたが、すぐにいつもの読めない微笑を取り戻した。
「燃え残った手紙からも事件への関わりは読み取れます。お手柄です、ゼロ」
にこやかに労うエドガーを、ゼロは面白くなさそうな表情で睨んだ。
「エドガー、お前はもしかして、俺が暖炉に気づくか試したのか？」
エドガーは、一瞬きょとんとした顔になったが、すぐにコロコロと笑い出した。
「俺は暖炉を調べて煤まみれになるのが嫌だっただけです。ゼロ、アンリと再会する前に、顔を洗うことをお勧めしますよ」
ゼロが窓ガラスに映った自分の姿を確認すると、顔も髪も制服も真っ黒な煤で汚れていた。彼は顔をしか

めると、楽しそうに笑うエドガーを睨みながら、自分の鼻の頭についた煤を袖口で拭った。

15

援軍と合流してからは早かった。

念のため2名の兵士を幼い兄妹の護衛に送り、残りの兵士たちで、劇団員を一斉に捕まえた。練習場として用意されていた部屋に兵士たちが雪崩れ込むと、事態を悟った劇団員たちは、皆自分だけでも逃げようとしたが、ゼロの優秀な部下たちは、一人も逃さず手際良く捕縛した。

そして今、ゼロとエドガーは温室でモートン卿と対峙していた。

温室にはモートン卿と使用人がいた。

「ご無沙汰しております、モートン卿。赤のジャック、エドガー・ブライトです」

ゆったりと紅茶を楽しんでいたらしいモートン卿は、慇懃な挨拶とともに現れたエドガーに慌てた。

「い、一体、何事かね……？どうして赤のジャックがここに」

「ここにいる赤のエースは我が軍の重要人物です。あまり長く留守にされても困るので、迎えに来たんです……そしたらまあ！」

エドガーは笑顔を崩さないまま、テーブルに両手を付き、モートン卿に顔をぐいっと寄せた。

「本当に偶然、この屋敷の中で興味深いものをお見かけしましてね。ぜひクインシー家と当家のお付き合いのお話を伺いたいのですよ」

エドガーは一瞬だけ微笑を消し、真顔になった。

「どうか、お人払いを」

クインシー家の名を聞き真っ青になったモートン卿は、ぎこちない仕草で使用人を下がらせた。

こうなるとエドガーの独断場だ。ゼロは少しだけモートン卿に同情しつつ、念のため、温室全体が見渡せる入り口に立つ。

「ここに、クインシー家紋章の封蝋とあなた宛の手紙があります。今後、火の始末にはもう少し慎重になることをお勧めします」
モートンは決定的な証拠を突きつけられ、声も出せない様子で、だらだらと汗を流し始めていた。
エドガーは慈愛さえ感じさせるような微笑を浮かべつつ、続ける。
「でもね、俺はこれを軍には届けず、手元に置いておきたいなと考えているんですよ」
エドガーの言葉の真意を探るように、モートン卿は恐る恐るエドガーの顔を見る。
エドガーは痛ましげに眉を寄せてみせた。
「俺はあなたもまた、アヴァロン事件の被害者だと思っています。あなたは悪いことには向いていない。善良なあなたを罠にはめた人たちのことを教えてくれませんか……クインシー、そして」
「……ガーナー、……シェルダン」
暗示にかかったようなモートン卿の口から、さらに思いがけない貴族の名前がこぼれ落ちた。
ゼロは、もう少しで声を出してしまうところだった。
一年近く軍を悩ませ続けていた事件の黒幕が、あっけなく白日のもとに。しかも、ガーナー、シェルダン両家も、クインシー家に劣らぬ名家だ。
これはちょっとした騒動になるぞ。
「そう。クインシー、ガーナー、シェルダン。彼らの罪は重い。俺は彼らを正しく裁かなくてはなりません。ご協力、いただけますね」
モートン卿は不安そうな表情でエドガーを見る。
エドガーは、モートン卿を励ますように、優しく微笑みかける。
ああ、あの笑顔だ。あの笑顔に俺も何度もひっかけられた。
ゼロは寄宿学校時代の諸々を思い出してしまい、ついモートン卿に同情しそうになった。
「あなたが俺に協力的である限り、あなたはブランシェットの名士、モートン卿のままです」
モートン卿はやっとエドガーが取引を持ちかけているのだと理解したらしい。

「わかった……、わかった、協力する。何でも協力するとも」
「ええ、これは軍ではなく、俺個人とあなたとの約束です。どうぞ、末永くよろしくお願いしますね」
エドガーが仕上げのように微笑んだ。
「は……はは……」
モートン卿は青ざめた顔のまま、引きつった笑いで応えた。
ゼロはそっとため息をついた。
気の毒に。
悪魔とは決して契約してはならないと、誰も彼に教えてやらなかったのか。

16

アンリはリコスを連れて、誰もいなくなった訓練場を歩いていた。訓練が終わった後の無人の訓練場は、ゼロがいない時のリコスの散歩コースだ。
ゼロは無事だろうか。
アンリは祈るような気持ちで空を見上げた。
冬の日はとても短い。西の方に少しだけ日の名残を残す薄明るい空に、星が瞬き始めている。
ぼんやりと星を眺めるアンリの足元で、突然リコスが元気に吠え始め、駆け出そうとした。
「わっ、どうしたのリコス」
アンリは慌ててリードを握りしめる。
(あ、もしかして……!)
アンリは予感を胸に抱き、リコスと一緒に門の方へと駆け出した。
思った通り、ざわめきが聞こえ始める。
兵士たちの帰還だ。
アンリはリコスに負けないように息を切らしながら必死で駆けた。
門を潜ってきた隊列の先頭に、エドガーと並ぶゼロの姿が見えた。
「ゼロ……!」
馬から降り、笑顔で手を差し伸べるゼロの腕の中へ、アンリは真っ直ぐに飛び込もうとした。
それなのに。

「おやアンリ、これが本物のゼロだとどうしてわかるんです？」
「えっ！」
意地悪なエドガーの声に、アンリはゼロの手前でぴたりと止まってしまった。
ゼロの方へ腕を伸ばしたまま、立ち尽くしてしまう。
その間に、リコスが華麗なジャンプを決めて、一足先にゼロの腕の中に飛び込んだ。
ゼロは笑いながらリコスを抱きとめた。
「よしよし、えらいぞ。アンリを守ってくれたんだな」
リコスは尻尾を千切れんばかりに振りながらゼロの顔を舐めている。
ゼロは途方に暮れて立ち尽くすアンリを見て、困ったように笑った。
「エドガー、あんまりアンリをからかうな。……ただいま、アンリ」
ゼロは離れようとしないリコスを左手で抱き直すと、もう一度アンリの方へ右手を広げた。
ゼロだ。
ちゃんとわかる。これは、本物のゼロ。
アンリは傍でクスクスと笑うエドガーを軽く睨んでから、今度こそゼロの煤だらけの腕の中に飛び込んだ。
「おかえりなさい、ゼロ！」

17

アヴァロン事件はすぐに劇的な解決を迎えた。
一週間かけてクイーン、8、9の隊が集めた完璧な証拠は3人の貴族に言い逃れを許さず、彼らは今までの地位を剥奪され、裁判を待つことになった。詐欺の被害にあった人々への補償についても、裁判に委ねられることになった。

そして寒さが少し和らぎ始めた頃、ランスロットは事件解決の報告のために森の奥のハールの家を訪れていた。
今日は下戸のシリウスがいないので、二人で手土産のワインを開けることにした。

「いいワインだな」
ランスロットはハールの賛辞に微笑んで見せる。
「……その、彼は元気にしているだろうか」
「ゼロのことか？普段通りだ」
「彼には、……悪いことをしてしまって」
ハールが言い淀む。
ランスロットの脳裏に、ゼロたちが帰還した時の記憶が蘇った。
ゼロの無事を確認し、帰ろうとしたハールは、偶然指名手配犯パペットを連行するゼロたちとすれ違った。そこで連行されている男に、偽者のゼロと同じ魔法がかけられていることに気づいたのだ。ハールはその場であっさりとその魔法を解いてしまい、指名手配犯パペットだと思っていた男は全くの別人だったことが明らかになったのだった。
自分が捕まえた犯人が別人だったと知り驚愕するゼロを見て、ハールは自分がしたことに気づいて狼狽した。
あの時のゼロの愕然とした表情とハールのおろおろと狼狽える様子を思い出すと、つい笑い出しそうになる。ランスロットは意識して頬を引き締め、咳払いした。
「むしろこちらが礼を言うべきところだろう。誤認逮捕など、我が軍の沽券に関わる。それに、奴らも全くの無実というわけではない」
モートン家に滞在していた劇団は、凶悪犯でこそなかったが、行く先々でケチな窃盗を繰り返している犯罪集団だったのだ。
ハールは申し訳なさそうな表情のまま目を伏せた。
ランスロットから見たゼロは立派な成人男性であり、頼りになる部下だ。ところがハールの目には、どうも手助けが必要な、繊細な子供に見えているらしい。
ランスロットはハールとゼロの間に何があったのか知らない。ただ、ハールの様子から、彼が魔法の塔にいた時に何か接点があったのだろうと推測していた。ハールの中には子供の頃のゼロの記憶があり、おそらくはそのせいなのかもしれない。

「ゼロはそれほど弱くはない」
ランスロットはただそう言うにとどめた。
グラスを傾けながらアヴァロン事件の被害者のリストを見ていたハールは、あるページに目を止めると、ランスロットに見せた。
そこには一人の資産家の名前があった。
「これが理由かもしれない。彼はダリムさんの研究のパトロンだった。塔が行っていた許されざる研究ではなく、ダリムさん個人の研究を応援してくれていた。俺も何度か会ったことがある……二人は何だか気が合ってるようだった」
「ダリムが彼の仇を打つためにこんな手の込んだことを？」
「ダリムさんはわかりにくい人だけれど、彼なりに恩を感じていたのだと思う」
「また我が軍があいつにいいように利用されたのか」
ランスロットは眉をひそめた。
最初から、この事件の背後には強大な魔法使いがいた。
その魔法使いは偽者の指名手配犯でゼロを誘き寄せ、さらに偽者のゼロを赤の軍に送り込むことで、赤の軍にモートン家とアヴァロン・カンパニーとの繋がりを見つけさせた。ご丁寧に、更なる黒幕へとつながる証拠をつけて。恐らくゼロ達が暖炉から見つけた、燃え残っていた証拠も、魔法により保護されていたのだろう。
「誘拐事件（注1）といい、奴はもう少しましな手段は取れんのか」
ランスロットはため息まじりに呟く。
ハールは何も答えず、ただ苦笑のような笑みを浮かべた。

18

「やはり気が進まんか」
ランスロットはもう一度ゼロに尋ねた。
「申し訳ありません」
ゼロは頭をさげる。
赤の兵舎の執務室に、軍の首脳陣が集まっていた。

クレイドル中を騒がせたアヴァロン事件の解決への寄与を評価し、調査で活躍した兵士に勲章を贈ることになった。ランスロットはゼロに贈ろうとしたが、肝心の本人が、自分にはその資格はないからと辞退しているのだ。

「君がモートンを見つけなきゃ、この結果は出せなかった。俺は順当だと思う」

これはヨナ。

「俺がモートンに辿り着いたのは偶然だ。それに……」

それに。

言葉を濁したゼロの気持ちを汲むように、ランスロットが苦笑に近い笑みを浮かべた。

「お前の気持ちもわかるが」

いわばゼロは正体不明の魔法使い――恐らくはダリムの思い通りに踊らされていたのである。

「ゼロ、お前が帰途でパペットに気付かなければ、モートン卿へたどり着くことはできなかった。たとえ彼が偽者であったとしても、十分評価に値する」

ランスロットの言葉に、ゼロは困ったように目を伏せた。

ランスロットは、生真面目なゼロの、日頃の地道な取り組みをいつか評価してやりたいと考えていた。

だが、本人が望まないのなら仕方ない。

「さて、どうしたものか。勲章の授与は兵士たちの士気を上げる良い機会だと思ったのだが」

「それでは、こういうのはいかがでしょう」

それまでずっと黙っていたエドガーが、いつもの笑顔で提案した。

19

その日、リコスの心は沈んでいた。

いつものように朝の散歩を待ちかねていたら、いきなり大嫌いなお風呂に放り込まれ、念入りに洗われてしまったのだ。しかもいつものゼロとアンリなら追いかけっこも楽しめたのに、今回は5人がかりでバスルームに閉じ込められ、それはそれは丁寧に洗われてしまった。

少し長めの毛は魔法で乾かされ艶々でふかふかになったし、お風呂のあとは珍しくゼロがずっと抱っこしていてくれて嬉しいけれど、それでもリコスの心の傷はまだ癒えていない。
「リコス、まだ怒っているのか。そろそろ機嫌を直してくれ」
ゼロの優しい声がしても、リコスは俯いたままだ。
「もうしばらく大人しくしていてくれよ」
ゼロが苦笑しながらリコスの頭を撫でた。
それにしても、今日は一体何だと言うのだろう。
兵士たちが勢揃いして並んでいる。
リコスの大好きなもふもふの人、赤のキングが壇上で何か難しそうなことを話している。
やがてリコスはゼロに抱かれたまま壇上に上り、台の上に座らされた。
赤のキングが何やらキラキラしたものを手に、こちらをむく。
リコスは雰囲気に飲まれるように、行儀良く座った。
もふもふが気になって仕方がないけれど、赤のキングが小さな声で「今は我慢せよ」と言うので、ぐっと我慢する。
「リコス。お前は主人の異変を真っ先に検知し、我が軍の大切な従業員を身を挺して守った。そして我々をアヴァロン事件の解決へと導いた。お前の我が軍への多大なる貢献を評し、これを授与する」
赤のキングはそういうと、リコスの首輪に金色のキラキラしたメダルをつけてくれた。
「これからも主人の言いつけを守り、健やかに育て」
そう言って赤のキングが頭を撫でてくれたときには、リコスは今朝のお風呂のことはすっかり忘れ、上機嫌で尻尾を振っていた。

20

「大人しくしてたな、えらいぞ」
「すごく立派だったね。かっこよかった」
リコスの視線がずっとランスロット様のマントの飾りを追っていてハラハラしたけれど。

アンリは、勲章を首元につけ、ゼロの腕の中でどこか誇らしげなリコスを褒めた。
「立派な勲章がもらえてよかったですねえ、リコス。俺からもご褒美をあげましょう」
エドガーも犬用のビスケットを手にリコスを褒めてくれる。
「全く、お前もとんでもないことを思いつく」
ゼロの呆れた声。
「まあまあ、お前が勲章を辞退したりするからでしょう。見たところ兵士たちの4分の3ぐらいが笑顔でしたよ。いい授与式でした。4分の1はきつねにつままれたような顔をしていたけれど」
エドガーが鈴を転がすようにコロコロと笑った。
いっそリコスに勲章を授与しては、と提案したのはエドガーだと聞いている。
「わたしあんなにみんなが優しい笑顔になってる授与式は初めて見たわ」
アンリは嬉しかった。

リコスに贈られた勲章は、実はゼロへの評価でもある。ほとんどの兵士はそれを理解し、そして笑顔で祝福してくれたのだ。
深紅の血統以外を認めなかった赤の軍にしては、上々ではないか。
「よかったなあ、リコス。これはお祝いだ」
カイルがふらふらとやってきて、リコスにリボンをかけたジャーキーの袋を差し出した。そして真剣な顔でリコスに言う。
「なあ、これやるから、もし万が一俺の偽者が現れた時は、ちゃんと気づいてくれよ」
グゥはこういう時は今ひとつ頼りにならないからなあ、とぼやく。
「カイル並みの名医がそうそういるとは思いませんけどね。見た目だけ真似ても、誤魔化せるものではありませんよ」
あっさりとゼロの偽者を見破ったエドガーが笑った。
実はゼロの偽者事件は、赤の兵士たちに軽いトラウマを植え付けていた。

――もし、自分の偽者がいつの間にか自分と入れ替わっていたら。

その時、もし誰も気づいてくれなかったら。

誰もがそんな不安を感じたのだ。特に実際にゼロの偽者を目にした兵士たちが感じた不安は大きかった。それほど偽者のゼロはそっくりで、当初、アンリとリコス以外は気づかなかったのだから。

幹部達も例外ではない。

「……パインは俺が入れ替わったら気づいてくれるかしら」

あのヨナでさえ、弱気につぶやいたりする。

「右腕が入れ替わったら俺も気づくと思うが」

「我が主……！」

ランスロットの一言で、ヨナはこの日1番の笑顔になった。

アンリはゼロとそっと微笑み合うと、朝の大騒ぎで行けなかったリコスの散歩に向かうことにした。

リコスは相変わらずゼロにじゃれついてゼロは歩きにくそうだ。それでもその首元にキラキラと輝くメダルが揺れる度、アンリはなんだかとても誇らしく、幸せな気持ちになるのだった

注1　弊サイト長編「愛さずにいられない」に出てきた連続少女誘拐事件のこと。知らなくても大丈夫です。

表紙　あおい（@aoiaoi_116）様

ありがとうございました！

【おまけ】公式にない固有名詞の説明

アンリ　ロンドン出身、赤の軍の看護師、ゼロの家族で友達で恋人
マリク　赤のエースの隊の優秀な小隊長、隊長大好き
クレイトン　赤の兵舎の食堂の優しい給仕係

以上３名は弊サイトのＳＳでもよく活躍しています。
気になった方はぜひお時間のある時に「愛さずにいられない」をご覧ください（宣伝）。

モートン卿　ブランシェットの大地主
ユノ　モートン家長男、５歳
エリサ　ユノの妹。４歳
クインシー家　赤の領地の名家
ガーナー家　右に同じ
シェルダン家　右に同じ
パペット　指名手配犯
クリストファー　流しの劇団の俳優

アヴァロン・カンパニー　クレイドルの海外投資会社
ブランシェット　クレイドル郊外の長閑な村